ひまわりからのメッセージ

86号
2018.7.9.
NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

様々なニュースがあふれる中で・・・・

サッカーのワールドカップが終わり、高校野球も始まろうとしています。負けてもさわやかなサムライジャパンの帰国ニュースでしたがこの一週間のニュースの中で心痛んだニュースがありました。

一つは、津市の施設で日常的に行われていた障害のある方への虐待のニュース、もう一つは裏口入学のニュースです。

障害者差別解消法が制定されているにもかかわらず、無くならない差別や虐待。しかも弱い立場の人々を守る立場にある施設で何度も繰り返されることに怒りと悲しみを禁じ得ません。個人的にはいけないことと分かっていても、自分以外の人が全て反対の立場であると、例えまちがっていても「集団圧力」が働くことで他の人に同調してしまうという説があります。津市の施設のような所が多くはないことを祈りつつ、私たち一人ひとりの心の中に棲んでいる差別に自ら立ち向かっていく必要があるのだろうと思いました。

文部科学省の局長の事件を知って、私が心を痛めたのは、入学した息子さんのことでした。おそらく本人は、自分が裏口入学だったとは知らず、合格を素直に喜んだのではないでしょうか。自身の裏口入学にからんで父親が逮捕されたという事実を彼はどの様に受け止めたのでしょう。親ばかということばがあります。辞書には、「親が子をかわいがるあまりに理性を失い、他人からは愚かと見える行動をすること」とあります。高級官僚として生きてきたこの人は、結局は自分の人生だけでなく息子の人生までも狂わせてしまったのです。自分の子のことしか見えないということのない様に、そして五年後、十年後の我が子の姿を想像しながら、今できることを地道にやっていきたいですね。

先日、郡上市の保育士会があって出かけました。郡上に行くと、私は必ず郡上八幡城の急坂を登ります。一方通行の坂を上ると、駐車場に着きます。樹々のみどりが私を包んでくれて、遠く行き交う車の音や、うぐいすの谷渡りが聞こえ、しばらくの間、その静寂の中に浸ってきました。忙しい中で、ほんのわずかな刻を見つけることが心の栄養になるように思います。自分の心のハンドルを切りまちがえない様に・・・・。

雨の日には ゆっくり読書を!!

雨の日が続くと、何となく本が読みたくなって書棚の前に座りました。この半世紀、購入した様々な本があり、まだ目を通していない本のあることに気づきます。でも、多くは古くなって、理論的にも使えなくなっているものもあります。

そこで今回は、新しい検査などアセスメントツールを紹介してみようと思います。

園の年少、年中、年長児の発達評価ツール

TASP（タスプ）

私たちが目の前のお子さんや相談者を理解しようとする時、アセスメントの方法として、行動観察法、面接法、心理検査法があって、必要であればいくつかの心理検査を組み合わせて実施することもあります。

TASPは一年余り前に売り出された、いわば出来たてのツールです。園に通っている幼児を対象に、お子さんがどこで困っているのかを見つけて、具体的にどの様な支援をしていくと良いのか、探っていくツールです。

早期発見ということばは、あたかも障害の発見のようにとられがちですが、私は障害という決めつけはしてほしくないと考えています。

TASPは①落ちつき ②注意力 ③社会性 ④順応性 ⑤コミュニケーション、⑥微細運動 ⑦粗大運動の七つの領域から考えられていて、指標として外在化指標、内在化指標、学業指標という三つの指標があります。七つの領域でその子の発達特性を探り、将来不適応問題につながる可能性を指標で探ります。そして、不適応問題につながる可能性を知ることで、よりよい支援を行っていこうと考えていくわけです。

今まで漠然としていた幼児期の子どもたちの「困り」が明確になり、園でどの様に支援していけば良いのかのヒントをもらえるでしょう。TASPは、年少、年中、年長とつけることができ、年長から小学校への引きつぎのツールとしても使うことができます。また、若い保育士さんたちでも、日頃子どもたちと関わっている人たちであれば簡単につけることができるのもTASPの魅力です。

けれども、どの様な検査であっても完璧なものはありません。使う人たちが、単に子どもたちの特性をきめつけるために用いたり、「やっぱり○○だから仕方がない」と、自分の責任を子どもたちに転嫁するようなことがあってはならないでしょう。

保育園、子ども園、幼稚園におつとめの先生方は一度目を通していただいて、保護者の方と話し合いながら保育や家庭での子育てに生かしていただけると良いでしょう。

適応行動尺度 Vineland Ⅱ

さて、もう一つ、日本版ヴァインランドⅡという適応行動尺度をご紹介しておきます。

皆さんは「知的障害」を、どのようにとらえていらっしゃいますか？ 文科省では「発達期（十八歳以下）に起こり、知的機能の発達が同年令の平均的水準より明らかな遅れがあり適応行動の困難性を伴う」とされているのですが、私たちは、一般的診断基準のIQ（知能指数）七〇以下を思い浮かべます。しかし、アメリカ精神医学会の診断基準であるDSM-5では、各々のレベルはIQ値ではなく、適応機能に基づいて定義されます。

考えてみると、私たちは長い間IQに惑わされて（？）きたのかもしれません。でも、では、適応行動って何でしょう？ 知的機能（認知機能）が、見る、聞く、話す、おぼえる、考えるなど物事を理解し情報処理する能力とすれば、適応行動は、セルフケア、社会性、コミュニケーション、学習や仕事、余暇など、より生活に基づいた力といえます。

ヴァインランドは、アメリカで開発された標準化検査でコミュニケーション領域、日常生活スキル領域、社会性領域、運動スキル領域、不適応行動行動指標などに分かれています。そして、可能性の左ックではなく、本人の行動そのものを評価するところに特徴があります。できる力をもっていても今までやったことがなかったり、一人で全くしなければ「0」に○をつけるのです。一人で通常または習慣的にしている場合は「2」、一人で時々行動する、あるいは部分的にしている場合は「1」となります。

検査の対象者の年令は0～九二歳で、回答者は保護者や近親者など本人をよく知っている人になります。そして検査項目には年令が記入されているので、対象者の年令から始めることになります。

例えば、七歳の子の日常生活スキル領域には七～十歳の項目として次のようなものがあります。

- かき混ぜたりするような簡単な調理の手伝いをする。（例えばホットケーキミックスを混ぜるなど）
- 自分の物を言われなくても片づけることができる。（例えば おもちゃ、本、雑誌など）
- テーブルの自分の場所から割れ物を片づける。

・洗濯した物を適切な場所に整理する。
（例えば　タンスやクローゼット、フックにかけるなど）
・簡単な台所用品の操作ができる
（例えば　トースター、缶切り、栓抜きなど）

この様に書くと、各項目をクリアしなければと思われるかもしれませんが、そうではなくて、一人ひとりの個人にとって学習可能な適応スキルなのかどうか、ツールが必要な領域なのかどうか、環境および人的支援が必要な領域かをまず考えてみることです。

成長していく過程で個人が抱える困難さや問題は実にさまざまです。しかし、個人の特性は生涯を通して、ほぼ一貫していると考えることができます。そして、何もしなければ特定の困難性は、ずっと続いていくことになります。

子どもたちと話していると、「まだ習っていないので分かりません」、「そんな場に出会っていないので知りません」などと答える子どもたちが少なからずいるのです。そして、周りの大人たちも、子どもにやらせるよりも自分でやった方がずっと速く、あとの面倒もなく、子どもたちの反抗にも会わないので、大人がやってしまっていることも多いのでしょう。適応行動は、それぞれの年令によって重要となるものが異なりますし、環境によっても異なります。ただやはり過干渉は禁物です。

ヴァインランドⅡでわかることは、その人の適応行動の全体的な把握です。一般の人と比べてどの位置にあるかを知りその人のニーズを知って支援計画を立てて実施していきます。

困っている時に助けを求めることも生活していく上での大切なスキルですが、自分の「困り」がわかっていなければ助けを求めることもできません。家族が本人の特性や困難性に気づいていないこともあります。自分が出来る限界を知っておくこと、そして助けを求めたらうまくいったという体験も大切です。ヴァインランドの項目を改めて見直しながら、「勉強ができるから……」と生活に目を向けられなかった保護者の方や、就労に向けて「ぼくは、そんな仕事をする人間ではありません！」と言ってことごとく仕事を拒否した人を思い出しました。そして、知能検査だけにこだわらず、ヴァインランドⅡを実施することも、今後は大いに考えていくべきではないかと思ったことでした。

お知らせ

・NPOひまわりの花の事務所を移転することになりました。引越しの日は未定ですが、いかわクリニックから歩いて五分程の所になります。
・八月の例会はありません。九月十日の会場は、中川ふれあいセンターです。